



Title	日本新歌舞伎と韓国唱劇に関する比較研究：坪内逍遙「桐一葉」と李(言語人種「銀世界」の近代性及び近代演専攻)劇史における役割を中心に
Author(s)	朴, 泰圭
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/58743">https://hdl.handle.net/11094/58743</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	朴 泰 圭
本籍（国籍）	
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	甲第6号
学位授与年月日	平成12年3月27日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	日本新歌舞伎と韓国唱劇に関する比較研究 —坪内逍遥『桐一葉』と李人植『銀世界』の近代性及び近代演劇史における役割を中心に—
論文審査委員	主査 教授 尾上 新太郎 副査 助教授 弦 卷 克 二 副査 教授 武 田 佐知子 副査 助教授 田 中 仁 副査 教授 細 谷 昌 志

## 論文の内容要旨

### 1. 始めに

本研究の目的は、日本の新歌舞伎と韓国の唱劇に関する比較文学研究を通して新歌舞伎と唱劇に関する理解を広げると共に近代演劇史のなかで両演劇を再評価し、両国の近代演劇研究に関する新しい資料を提供することである。

韓国と日本の演劇は長い歴史をもち、時代の変遷に伴ない様々な変化を見せて来た。特に、大量の西洋文化が輸入された両国の近代期は、共に演劇の変化が最高潮に達した時期であるが、日本の新歌舞伎と韓国の唱劇はそのような状況のなかで登場した新しい演劇である。新歌舞伎を含む日本の近代演劇は西洋の近代劇を積極的に受け入れ、様々な面で相当な影響を受けた。その為、日本の近代演劇を論じる際には西洋からの影響関係を考察しなければならないが、韓国の近代演劇も同じような事情をもっている。近代を風靡した日本の新派劇は、韓国の近代演劇界に輸入され、韓国の風土に合う新たな演劇として定着した。それ故に、韓国の近代演劇を論じる際には日本からの影響関係を考察しなければならないが、本研究はこのような観点からパンソリや歌舞伎を基にしながら、共通して伝統劇とは異なる新しい近代劇として成立し、更に影響関係が予想される新歌舞伎と唱劇を、『桐一葉』と『銀世界』を中心に比較検討することにする。

### 2. 新歌舞伎と唱劇の演劇史的背景

1894年に発表された『桐一葉』は、片桐且元を主人公とする新歌舞伎の先駆的な作品であるが、新歌舞伎『桐一葉』の登場は日本演劇改良運動と密接な関係を持っている。日本に「演劇改良会」が出来たのは1886年のことである。末松謙澄・依田学海等の政界・財界・学界の有力者によって、政治的必要性から誕生した演劇改良会は歌舞伎を近代劇として改良しようとした。しかし改良会の

演劇改良運動は高く評価されず、日本の演劇を無理に改良しようとしていると厳しく批判されたが、坪内が演劇界と縁を結ぶようになったのも改良運動に関する、特にチョボや女形の廃止に関する反駁文を『読売新聞』に発表してからである。坪内は演劇改良会の解散後その後身として結成された「日本演劇矯風会」「日本演芸協会」に参加するが、それらへの参加が『桐一葉』の創作は勿論のこと、坪内の演劇活動のきっかけになったのは言うまでもない。

円覚社で公演された『銀世界』は確認された最初の創作唱劇であると言えるが、唱劇『銀世界』の登場は『桐一葉』と同じように韓国の演劇改良運動をその背景としている。当時の新聞を参考にすると韓国の演劇改良は、(1) 私設劇場の運営権を持っていた民間人によって提唱され、(2) 円覚社のような私設劇場が中心になって、(3) パンソリを対象に、(4) 公演形式の変化を図り、また新しい内容の創作作品を公演するということであつたが、(5) このような改良はまず営利的な面では観客を確保し、社会的な面では国民啓蒙を図るために行われたと見られる。唱劇『銀世界』はパンソリを基にしながらパンソリとは異なる新しい形式と内容を見せたが、唱劇『銀世界』はこのような演劇改良気運によって誕生した近代期の新しい演劇であると言える。

以上で分かるように『銀世界』と『桐一葉』は、同じように両国の演劇改良運動をその背景としている。ただ異なるのは、韓国の演劇改良運動が民間人によって素朴に行われたのに対して、日本の演劇改良運動は政府や政治家によって大規模に行われたと言うことであるが、このような差によって唱劇と歌舞伎は異なる方向へ進むようになったと言える。

### 3. 『桐一葉』と『銀世界』における両作家の創作動機

1917年『新演芸』を通して発表された『『桐一葉』執筆の動機』には『桐一葉』の執筆動機が詳しく書かれている。坪内はその執筆動機を、第一に、活歴劇への反抗、第二に、歌舞伎へのシェークスピア的作風の導入、第三に、審美論に対する反抗の三点をあげて説明している。しかしこのような創作動機は、その内容上大きく伝統劇に対する理解とシェークスピア劇に対する理解という二点に分けられるが、『桐一葉』の創作動機は伝統歌舞伎とシェークスピア劇と言う異なる演劇に対する理解を基にして成立したものであると言える。

これに対して李人植は、『銀世界』の創作動機を日本の演劇改良運動やその延長線にある新歌舞伎の間接的な経験から得たと見られる。李人植が東京政治学校に留学したことはよく知られている。東京政治学校は憲政党と密接な関係を持ち、憲政党の影響下に設立したと見られるが、ここで注目すべきは末松謙澄・福地桜痴・和田垣謙三・田口卯吉等のような演劇改良会の関連人士が学校の講師を勤めていたということである。勿論そのような人物に李人植が直接影響を受けたかどうかは確認できないが、彼が政治学校を通して改良運動に間接的に接し、そこから刺激を受けた可能性はある。更に李人植は留学時期、都新聞社で見習いをしたことがある。『都新聞』は演劇改良を図る歌舞伎界、そのなかでも特に守田勘弥と密接な関係を持っていた。李人植が見習いをしていた 1901

年11月から1903年5月の間、『都新聞』は広い紙面を使って様々な演劇関連記事を載せていたが、それらの記事を参考にすると、新派劇の全盛期を迎えたにも関わらず、当時の『都新聞』は新派劇ではなく新歌舞伎を含む歌舞伎を主な演劇として扱っていたことが分かる。つまり、李人植は新聞社での見習いを通して歌舞伎改良運動や新歌舞伎運動に間接的に接し、唱劇『銀世界』の創作動機を得た可能性が高い。

先に述べたように新歌舞伎と唱劇はその影響関係が予想されていたが、作品の創作動機に限って言うのであれば、李人植の唱劇『銀世界』は坪内の『桐一葉』を含む新歌舞伎から影響を受けた可能性が高いと言える。

#### 4. 『桐一葉』と『銀世界』の比較分析—近代性を中心に—

『桐一葉』と『銀世界』は共に、構成・人物・主題において近代的な特徴を見せている。構成における近代性から考えてみると、『桐一葉』は伝統歌舞伎とは異なる単一性と二重葛藤関係を見せ、『銀世界』はパンソリ作品には見られない二段構成と言う近代性を見せている。人物において『桐一葉』は、情熱に乏しい気の弱い主人公を登場させている。『桐一葉』の主人公片桐且元の弱い性格は依田学海や上田敏によって厳しく批判された。しかし気の弱い且元は坪内の描く境遇悲劇に最適の人物であったと言えるが、『桐一葉』は且元の弱い性格によって人物における近代性を持つようになったと言える。『銀世界』はパンソリ作品によく登場する消極的で行動力に欠けた人物を主人公として登場させている。ただ『銀世界』の主人公である崔秉陶と玉男が、パンソリ作品の主人公と異にしているのは、社会の矛盾を指摘することの出来る問題意識を持っていたということであり、彼らの見せた問題意識は『銀世界』の大きな特徴になっている。『桐一葉』は「忠」と「人間愛」を主題としている。これに対して『銀世界』は「愛国」と「人間愛」を主題としている。主題において『桐一葉』と『銀世界』が同じように「人間愛」を見せているのは非常に面白い点であるが、両作品の「人間愛」は共に近代という時代的な背景と関係していると見られる。鎖国のなかで長い間身分制度をもって社会を維持してきた両国は近代を迎え、漸く人権と言う問題を一人一人が考えるようになった。『桐一葉』と『銀世界』に見られる「人間愛」はそのような社会的変化の発露であると言えるが、「人間愛」は両作品の見せた最大の近代的特徴であると言える。

先に考察したように李人植が新歌舞伎に間接的に接した可能性はあるのだが、文学作品や公演を通して『桐一葉』を直接的に経験したかどうかは確認出来ていない。そして以上で明確なように、主題において「人間愛」と言う共通点を持っているとは言え、その近代性において『桐一葉』と『銀世界』は殆ど類似点や対比点を見せていない。このことは両作品は実際において直接的な影響関係を持っていないと言うことを意味する。李人植は日本の演劇に関する経験をきっかけに作品創作に臨むようになったが、創作の具体的な部分においては日本演劇からの影響を受けることなく、韓国の特殊な社会事情に合わせて創作を行ったと言える。

## 5. 終りに

以上で考察した韓国の唱劇と日本の新歌舞伎は、近代演劇史のなかで夫々異なる役割を果たしている。日本の近代演劇史において新歌舞伎『桐一葉』は、新派の急速な成長による不況や不振の時期、歌舞伎界の新しい飛躍の為の突破口になり、文学者の史劇創作への動機付与に大きく貢献したと言える。これに対して『銀世界』は韓国の近代演劇史において、唱劇の定着は勿論のこと、創作作品の上演という新しい公演文化を定着させ当時の公演範囲を広げたという点で大きな役割を果たしている。演劇改良運動という同じ背景を持っている唱劇と新歌舞伎がその役割を異にしているのは、両国が異なる社会事情と演劇風土を持っていたからである。両国の近代演劇史は、両演劇の異なる役割によって更に異なる方向へ進むようになったと見られるが、それ程両国の近代演劇史における両演劇の意味は大きかったと言えよう。

本研究を通して、唱劇『銀世界』と新歌舞伎『桐一葉』の影響関係を明らかにし、唱劇と新歌舞伎を再評価することが出来たと思う。唱劇と新歌舞伎は近代という時代のなかで伝統劇の新たな姿を見せたという点で意味のある役割を果たしているが、両国の近代演劇史における唱劇と新歌舞伎の役割を正しく評価し、それを通して両演劇に関する理解を広げたと言う点にこの研究の意義を置きたいと思う。

## 論文審査の結果の要旨

本論は、

序論

第一章 近代以前の韓・日両国の演劇史

第二章 両国の近代における演劇改良運動と近代劇の形成

第三章 新歌舞伎『桐一葉』と唱劇『銀世界』の成立

第四章 『桐一葉』と『銀世界』の比較分析—近代性を中心に—

第五章 結論—日・韓両国の近代演劇史における『桐一葉』と『銀世界』の役割—

の六つのパートからなる。猶、付録として、論者・朴泰圭による小説『銀世界』の日本語訳が添えられている。

序論において、まず、論者は自己の依拠する立場を明確にする。論者は、基本的に広義の比較文学研究の立場に立つものである。広義の比較文学研究とは、一般論的に言えば、二国間の文学に見られる影響関係のみならず、文学と絵画・音楽・演劇等の他の芸術との関係、また、政治・経済・社会・歴史・哲学・宗教、こういった他の分野との関係、これらの研究をも主題的に行うものである、とされる。簡明に言えば、多角的な観点・問題意識を積極的に取り入れた比較文学研究である。

論者は、日・韓の演劇を、両国の政治・社会事情・歴史等にも視点を当て、それらの間の類似点、相違点、影響関係に留意しつつ、多角的に研究し、それぞれの理解を深めんとするものである。

第一章は、日韓両国の近代以前、つまり古代・中世・近世の演劇史を概観したもので、本論全体からするなら基礎的研究の位置にある。

第二章、第三章、第四章が、本論の中心をなす。

『桐一葉』（『早稲田文学』、1894—95年。初演、1904年）と『銀世界』（初演、1908年。初演後、同年、小説として刊行。猶、『銀世界』の脚本は、残っていない。従って、論者は、小説『銀世界』をもって唱劇『銀世界』の内容とし、考察を進めている）は、共にそれぞれの国の近代演劇改良と密接な関係がある。ただし、当時の両国の国家事情、社会事情には共通点も見られるが、相違点が多々ある。これらに留意しつつ、論者は、両者の（広義の）比較文学研究を進める。

その過程で、逍遙の史劇観の考察がなされる。逍遙は、歴史上の特殊な事情を客観的に把握し、その上で過去の事実の芸術化をはかるとした。豊臣家滅亡に伴う片桐且元、淀君、秀頼等の悲劇を、逍遙は根本的に時代状況を含む特殊な境遇によるものと理解した。『桐一葉』は、この点から境遇悲劇として創作された。これらが詳細に述べられている。

李人植の日本留学時代の研究は、注目に値する。李人植は、韓国における近代演劇・近代小説の世界で先駆的役割を果たした人物である。言論人でもあった。『銀世界』は、近代演劇としての唱劇の開闢を告げるものである。『銀世界』の出現は、韓国の近代演劇の始まりともされる。小説・『銀世界』も、同国の最初期の（広義の）近代小説とされるものである。しかし、今日、韓国での李人植の評価は高くない。これは、李人植が親日家であったからである。だとしても、そのことにこだわり過ぎてはならない。そう考える論者は、韓国近代演劇の開闢期において李人植が果たした役割の、自由な先入観に捕われない立場からの評価の必要性を説く。

『銀世界』の創作動機に日本演劇からの影響があったことは、すでに知られている。しかし、論者は、言われている新派劇からの影響については、どちらかというとな否定的である。一方、新歌舞伎からの影響については、肯定的に見る。このことに関して、李人植の日本留学時代の行実の詳細な研究を行っている。論者は、李人植が1900年から1903年にかけて留学した東京政治学校の講師陣と演劇改良会との関係、また、歌舞伎会と「都新聞」（留学中、李は、一時期、都新聞社で見習いをした）との関係、同新聞の性格、これらについて複数の資料に基づき詳細に検討し、『銀世界』の創作動機に、演劇改良会の歌舞伎改良運動と『桐一葉』を含む新歌舞伎からの影響があったことを説得力のある形で推定している。

また、李人植の演劇観についても考察している。李人植は、韓国帰国後、1906年、国民新報社に入社し、言論人としての活動を始める。『銀世界』の初演は、その2年後のことである。当時の韓国の演劇は娯楽中心で、言論人達には不評であった。彼等は、演劇を国民啓蒙の立場から捉えていたのである。これは、当時、韓国が置かれていた厳しい国家事情と関係する。韓国は、まさに国権喪失の瀬戸際にあつたのである。こういう国家事情、演劇事情の中にあつて、新しい演劇として、『銀世界』が登場したのである。これら、また、「都新聞」の記事等からして、李人植の演劇観は、開明思想に基づく国民啓蒙的なものだったと結論づけている。

以上は、主に第二章、第三章についてのものである。

第四章では、まず、『桐一葉』と伝統歌舞伎との作品構成上の比較がなされる。『桐一葉』は、伝統歌舞伎と相違し、筋に一貫性がある。主人公・且元の葛藤が、豊臣家の

内部における葛藤と外部の徳川との葛藤という風に二重になっている。こういう葛藤は、歌舞伎では殆ど見られない。これらのことから、『桐一葉』の構成上からの近代性を指摘している。

『銀世界』は、前編・後編に別れ、異なる思想をもった異なる主人公が登場する。作品の一貫性を考えた場合、単純でない問題がそこにあるとされる。前編の主人公は、崔秉陶。彼は、開化思想をもち、愛国主義者だった。後編の主人公は、息子の玉男である。論者は、崔秉陶の親友・金ジョンスに着目する。金ジョンスは、崔秉陶の思想に深く影響を受けた人物だった。崔秉陶の死後、玉男の面倒を親身に見、アメリカに留学させる。玉男は、金ジョンスの思想の影響を受ける。遑って言えば父親の。だが、金ジョンスの死後、アメリカ人・シェキアニスの影響で世界主義者となる。と共に、親日人士に変貌する。論者は、金ジョンスの死が原因になって玉男の思想に変化が起こると解釈する。そういう筋立てと理解するのである。そのことで、論者は、前編・後編のつながりに自然さが出るとする。作品構成から見たその一貫性の説明であるが、既存の研究に比べ、説得力がある。また、二編に作品を分けることは、伝統芸能・パンソリに比べ、新しいという指摘も行っている。

以上のことからして、論者は、『桐一葉』と『銀世界』とは、作品構成の点からして、共通して近代性をもっているとする。ただし、また、作品構成からする、その共通するとされる近代性を具に辿ってみると、相違点が出る。『桐一葉』では、作品構成上の近代性は、専ら創作理論に関係する。『銀世界』の場合、その点、それが作家自身の思想に関係して見られる。こういう指摘も行っている。

また、論者は、登場人物に視点をおいた両作品の比較をしている。『桐一葉』の主人公・且元は、強い人間ではない。しかし、こういう人物こそが境遇悲劇の主人公にふさわしいのである。このことは、作品の近代性を考える上で重要である。『銀世界』の主人公も、二人とも強い人間とは言えない。この種の人間は、パンソリにも出る。しかし、この二人は、社会を批判する問題意識をもっている。この点、パンソリとは相違する。ただし、『桐一葉』の場合、その弱さが、境遇悲劇の主人公たるにふさわしい人間の性格的なものであるのに対して、『銀世界』の場合、社会的、政治的な点での行動力の弱さになっている。こういう相違が見られると論者は、指摘する。

さらに論者は、主題の観点からする両作品の比較をしている。『銀世界』のテーマの一つは、愛国心だが、その内容の点では、登場人物の間で相違がある。玉男に即せば、彼の世界主義も紛れもなく愛国心だったのである。『桐一葉』は、「忠」を大きな主題としたものだが、且元も、通念と相違するものであったにしろ、彼流に忠の観念を確かにもっていたのである。そして、そのことが、且元、ひいては作品の悲劇性の要因をなしている。両作品の主人公達は、いずれも自己の内面を重視している。この点からも、それらの作品に共通したものとして、近代性を指摘することができる。ただ、それぞれの作家の置かれた国家的社会的環境は大いに相違する。愛国心が『銀世界』の主題と言う時、そこに作者の直面する厳しい国家的社会的現実問題があったことに留意すべきである。この種の厳しさは、逍遙にはなかった。結果、『桐一葉』は、『銀世界』に比し、一種の観念性を見せる。

両作品それぞれのもう一つの主題として、人間愛が上げられる。『桐一葉』の場合、それは、作者の近代意識に基づく。それに対して、『銀世界』の場合、近代意識の他に、天理教からの影響があったのではないかとされる。人間愛という理念がそれぞれの作者

において醸成された経緯には、相違する点があるのである。

第五章では、両作品のそれぞれの国における役割についての考察がなされる。

本論を評価する上で中心になるのは、李人植が日本から受けた影響について考察した部分である。李人植の日本における行実を資料に基づいて丹念に調べ、それを踏まえ、多角的に、そして詳細に、『銀世界』に関する考察を行い、その影響の実態について説得力のある結論を出している。また、その過程で、愛国主義から世界主義—事実は親日思想—へと変貌する李人植の問題を孕む思想を浮かび上がらせている。

本論は、広義の比較文学研究の成果が正しく得られている好論文と言える。